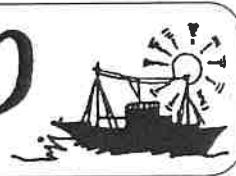


福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館 ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
連絡所 〒136-0081 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

「復初」の伝統を原点にして

堀 孝彦

「戦争が終わったところから平和を考えるのではなく、その出发点を戦争の真只中での試練的対応に求める」ことを提起したのは故・五十嵐頭さんだった。「『わだつみのこえ』を聴く」一九九六年)。アジア太平洋戦争末期、大学生らは中途で入営し特攻隊などで戦死していったが、戦争それ自体は本来、自己否定の契機を蔵し、「なんじ殺すなかれ」が人間を含む生命体の原点である！戦争は平和への必然の芽を宿しているからである。

素晴らしいことを言った直後に、突然その思考を切断し、国家による戦争を幾分なりとも流動化させることなく、既定の——と固定的に思念された「死」にだけ向かう。またこれらのエリート学生の隣席にいた若の朝鮮・台湾出身の「皇民」、アジア全域の他者理解の視野を欠いたこと、要するには社会認識への目が育っていないことなどである。(現今の例でいえば「つくる会」の教科書などはそれを助長させる。)

内保守反動派と、昭和天皇の政治利用を最大限重視した占領米軍との同床異夢による「合作」であったとしても(『敗北を抱きしめて』一九九九年)、われわれが、あれだけの加害・被害体験を通じ、これを核時代の普遍的原点として主体的に捉え返し、半世紀以上を生き続けてきたことに変わりない。

この視点を活かし、最近私は学徒出陣兵の遺書『わだつみのこえ』(I・II集)を読み返し、それを素材に①環境、②主体、③他者(異性と母性・「敵」・自然)、④国家、⑤社会と未来構想などなどに分類して抜き書きをつくり、「平和への必然の芽がどんなふうにも育われ」ていたかを分析してみた。あらためて確認できたことは、生理的にも心理的に最も抑圧された環境にあって、ほとぼり出たのは、死とは逆の生と人間性の賛歌であった。

それにも拘らず、この遺書を読んでも思いあたる文章がある。「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期する」。他から押しつけられたとは言わせぬ純国産品であるこの『教育基本法』倫理は、見果てぬ夢のかたちではあれ、あの出陣学徒らによって戦中に準備されてきたものと言えないだろうか。幕末以来、同じくそれを希求してやまなかつた先輩たちの「伝統」の流れの中に、学徒をも加えることができる。

『復初』によって造られるという「初」としての原点、一国民的回帰の「伝統」を、戦後はじめて確固として持つに至っていることが、かけがえのない新しい事態である。旧態依然とした右翼的な伝統だけが「伝統」なのではない。人類普遍の復初の伝統を持つに至ったという自覚から、自信が深まる。戦争でさえも自己否定の契機を内蔵する。どんなに不利な状況においても想像力により別の選択肢が見出せる「平和というもの」は平和とはいえない。閉塞状況を変化させる可能性に向けての多様な行動が、平和への力となる。

『平和憲法』作成過程が、国体護持の国

(名古屋学院大学教授・倫理学・平和学)



久保山さんの願い みんなの心に 九月二三日につどう

久保山さんの亡くなった日を記念して、第五福竜丸展示館では終日、さまざまな催しがおこなわれました。

平和を語るつどい(同語る会主催)は、今年九回目。一〇時半、中村博さん(日本子供を守る会会長)の司会、紙芝居朗読「一枚の卒業証書」で幕をあげ、渡辺享子さんの「よみがえった水仙」、埼玉レインボウ合唱団のうたごえ、平和を歌う会の子どもたちとア



子ども達が多数参加・平和を語る集い

コーディネーション演奏などに展示館東入口の空間はいっぱいの人になり七〇名余りが観賞しました。お弁当休憩をはさんでの午後の部は、鈴木勢以子さん、川口敬子さんの独唱、語り「ホテルになった兵隊さん」や口演童話「九月の秘密」、ミュージカル紙芝居「三年峠」の出し物がつづき、最後に沖繩の歌と三味線でにぎやかに締めくくりました。会の後、「つどい」から協会にたいし寄附がよせられ藤田副会長が受け取りました。

久保山忌句会は今年で二一回目。参加者は、午前一〇時半に展

示館前広場の久保山記念碑にりんどうの花を捧げました。第五福竜丸平和協会を代表して川崎会長が挨拶、参加者は展示館やエンジンを見学し、会場を江東文化センターに移して句会をおこないました。句会では、三句が同点優秀作品となり、平和協会の山村理事から「特別船員証」の賞状と記念品が贈られました。

第五福竜丸のつどい(東京原水協・江東原水協主催)は、午後一二時半より展示館の見学会をおこない、その後、夢の島総合体育館にて学習交流会をおこないました。

交流会には七〇人が参加、「船の保存に力を尽くした人々の思い出」として、一九六八年の三月二日にしんぶん赤旗で「第五福竜丸が沈められそう」との報道以来、福竜丸の保存と展示館について最も多く取材、紹介しつづけた故白井千尋記者について、夫人の白井雅子さん(新婦人の会副会長)が話されました。廃船当時、夢の島をふくむ東京



マグロを食べ反核を語る会

港の港湾管理にあたっていた都職労港湾支部の江藤勇一郎さんは、六八年の3・1ピキニデー集会で最初の保存の訴えをした人。分会ニュースでは、はやぶさ丸が福竜丸であることを知らせ、保存運動をひろげた経緯を話しました。参加者の三井周さん(平和協会評議員)からも、沈みかけた船を守った苦労話が披露されました。

マグロを食べ反核を語る会は、秋晴れで暖かいこの日、まぐろ塚の前にシートを敷いて築地で仕入れたマグロを食べながら交流の集いを開きました。昼食時には、平和を語る会の参加者も合流して四〇人ほどがにぎやかな輪をつくりました。会は最後に大石又七さんからマグロ塚のタイムカプセルが紹介されました(次号詳報)。

メッセージ from ヒロシマ

子ども平和のパフォーマンス

八万羽の折り鶴を願いをこめて

「戦争を越えて未来を作ろう、今私たちにできることを！」という呼びかけに応え、海外と全国から子どもたち一、五〇〇名が参加して「メッセージ from ヒロシマ」が八月五日に開催されました。

子どもたち自身が全体の企画・運営に関わったこの原水禁世界大会の特別企画は、若い世代への運動の継承を目的に初めて開かれたものです。

実行委員の一人柴田菜菜さんのオーボエ演奏で幕を開け、長崎出身で学生時代を広島で過ごしたというフリーライターの平野陽子さんと実行委員の栗原陽子さん(埼玉)、吉田成完くん(長崎)の司会で進行されました。

ヒロシマを伝えよう

はじめに堤千佐子さん(長崎)から、「二一世紀を担う私たちが平和の心を持ち続け、平和の大波

を巻き起こしましょう」と力強い発言がありました。実行委員のメンバー紹介の後、全国の子どもたちからの平和アピールとして各地を代表し、北海道から沖縄まで九人が発言しました。「このヒロシマで起きた出来事を伝え続けていくことが自分たちの義務だと思

う。」「武力では平和は築けない。誰もが戦争を二度と起こしてはいけな心と誓うことが平和を築くもと」「若者こそが自分の未来のために平和について真剣に考えて行く必要がある」「核兵器は地球上に一切必要がないことを学んだ」などの平和に対する熱い思いを語ってくれました。

第二セクションでは、折り鶴を作り、つなげ、平和のミニユメントを完成させるとい参加者全員での共同作業を行いました。

第三セクションでは、海外から

六カ国、総勢一六人の子どもたちが参加し、平和への思いを語ってくれました。

ベラルーシ共和国のシェルボクン(一五歳)は「八六年のチェルノブイリ原発事故で被爆し、葉を飲みつづけなければいけない生活を強いられている。この広島で原爆について学び、みんなと一緒に二度と核の被害を受けないよう力を合わせたい」と話しました。

ロシアのサンクトペテルブルグ(旧・レニングラード)の子どもたちからは学校にある「平和を守る子ども会」というクラブに所属し活動をしていることが紹介され、インドの子どもたちは、「平和の大切さを見せてくれた広島の人々が悲劇にもめげずに今日の繁栄を築いた勇氣や寛容に敬意を表します」と話しました。

祖父父母が広島で被爆した韓国の姜(カン)さんは祖母と一緒に登場し、「このような恐ろしいことが二度と起こらないことを願っています」とそれぞれの思いを発言しました。

「メッセージ from ヒロシマ」では平和ポスターの公募も行

い授賞式もありました。続いて平和のメッセージを世界に向けてパソコン通信を使い、電子メールで国連や首相官邸、核保有国の政府首脳などへ発信をしました。

未来を信じて

そして、いよいよ平和のミニユメントが披露されると大きな拍手と歓声が巻き起こりました。全国から寄せ集められたものを含めて、会場で皆が心一つにして折ったおよそ八万羽の鶴によって出来た大きな子どもの笑顔のミニユメントです。

最後に長崎の子どもたちが合唱指導をして、みんなで「ピリッ」(NHK「生きものの地球紀行」エンディングテーマ曲)を歌いました。「私たちは一人ではなく、支えあって生きている。I believe in future 未来を信じて生きていこう」という内容の曲をみんなで歌い子どもも、大人も、平和への誓いを新たにしました。

(核のない二一世紀にーメッセージ from ヒロシマ実行委員の

主婦連・和田会長ら 折り鶴を展示館に

九月一九日午後、主婦連合会の会長・和田正江さん、副会長の清水鳩子さんをはじめ一三名が来館、福竜丸平和協会の川崎会長の案内で船体や展示パネル、エンジンや久保山愛吉碑を見学し懇談しました。

主婦連では八月一日にむけて平和を考える催しとして、戦争体験を話し合うつどいを開いてきました。今年はそのとりくみと合わせて福竜丸展示館に贈る鶴を折るとりくみと呼びかけ、この日、折り鶴の寄贈と展示館の見学会をおこなったもの。

川崎会長は、第五福竜丸が訴えつづける原水爆のない二一世紀にむけて展示館が平和のために広く活用されることを希望しますと述べ、これにたいして、和田会長は、役員の中にはまだ第五福竜丸を見たことのない人もいます。これからさまざまな機会に展示館を訪れたいと挨拶しました。

持っている。この憲法が世界の人々の平和のために生かされるように活動していきたいし、それが国際的な役割です」とのメッセージを寄せました。

アメリカの演劇家、久保山愛吉さんをテーマに劇作品

アメリカの劇作家ラリー・ハント氏が故久保山愛吉をテーマに約一時間の一幕劇を作り、全米の大学や劇場を巡回する計画、「久保山プロジェクト」をたて、現在、資金集めをしているとの連絡が当協会に寄せられました。

ハント氏は久保山氏のストーリーは決して忘れてはならないとし、劇を見た人に印象深く残るようにと、ユニークな仮面劇にしています。

劇のシナリオとともにハント氏の劇の作風を紹介するビデオが送られてきて、早速展示館内でビデオを観賞しました。

劇に登場するのは久保山愛吉、歌舞伎の武者、龍、仏教修道士、技術者、医師、操り人形(群集、漁夫たち、久保山、アンクルサム、久保山夫人)です。

シナリオによれば、「久保山！

最後の犠牲者」というタイトルで、中見出しは「武者」「出帆」「不吉な前兆」「太綱」「投縄」「嵐」「ピカドン」「龍」「反響」「病の徴候」「帰国へ」「魚は泣いている」「死の灰」「家族への手紙」となっており、九月二〇日の久保山さんの苦しんでいる様子から、最後の言葉を遺してベットの上で静かになり、九月二三日の久保山愛吉夫人の悲しみで終わっています。

「海に生きたあなたよ」の詩の作者

埋田昇二さんの著作

著者は、静岡県で長年にわたり平和運動にたづさわり、詩人としても日本現代詩人会に属して、「魚のいない海」(一九六四)、「花の形態」(一九七九、第一回東海現代詩人賞)、「富獄百景」(一九八六第二七回中日詩賞)、「座敷童子」(一九九七年)などの作品集をもちます。

本書「詩と歌と平和ー『ヒロシマ』が視えてきた」は、著者の三十年余の詩作と平和運動の実践のなから、どのように詩作品が創造されてきたか、詩人の思索のあ

ゆみを記したものです。

序章の「被爆者でない私に『ヒロシマ』が視えるのか」から説きおこし、ベトナム戦争、核兵器廃絶、富士演習場をめぐるたたかひ、ビキニ事件と久保山すずさんのことなどの章をおして、平和運動と文化運動の、「人間の心の深いところで結びつき」、それが運動推進への力となっていることを説いていきます。

とりわけ印象的なのは、ベトナム戦争の最中、沼津・今沢海岸への米第三海兵隊の上陸訓練を阻止する中から生まれた「きみの瞳には視えないか」でのベトナムと沖縄人民への連帯。原水爆禁止運動の統一へのうごきの中で創られ、平和行進で歌われる「青い地球を」や3・1ビキニデーに歌われる、久保山愛吉さんを捧げた「海に生きたあなたよ」を含む合唱組曲。「青く輝く地球のために」や「富士」、合唱曲「ビキニの海は忘れない」「ひかりのバラ」などの詩作品の創作の経緯などです。

核兵器の廃絶・平和を希求し、現実のものとするために、著者の真摯な創造活動に心洗われます。かみがわ出版発行、B5判、七〇頁、一五〇〇円。